平成２０年１２月４日発行

北海道国際理解教育研究協議会

会　　長　後藤　　宏
事務局長　白石　邦彦

会報 第７１号

生きる力をはぐくむ国際理解教育

北海道国際理解教育研究大会空知大会
実行委員長　大津外志男
（岩見沢市立光陵中学校長）

１０月１０日・１１日，全道から多くの会員の皆様をお迎えして，第２９回北海道国際理解教育研究大会空知大会を開催し，様々な成果を実感しながら終了することができました。会員の皆様にはもちろん，参加いただいた多くの皆様に心から感謝とお礼を申し上げます。

さて，フィンランドのノキアという地名を社名にした“ノキア”という会社をご存知でしょうか。欧州の小さな国の小さな町の会社が，世界市場を相手に努力してきた結果だと思いますが，携帯電話で世界のトップシェアを誇る会社だそうです。

また，国民一人当たりの GNP 世界一は，フランスとドイツに隣接する人口４５万人ほどの小国ルクセンブルグです。アメリカの倍ほどの数値は，驚異的です。ちなみに日本は，この５年間で３位から１８位に急落したそうです。

空知管内には，江別市や北広島市に隣接する人口一万人弱の南幌町という町があります。南幌町バドミントン協会は，参加者が楽しめるよう大会ルールはもちろん大会運営や景品まで，柔軟な発想で見直し，今や参加選手が千人を超える大会を毎年開催しているのです。

一昔前であれば，テレビや新聞で見る外国のニュースの多くは，大きな国の出来事ばかりで，私たちの生活にはあまり関係の無いこととしてすぐに忘れ去られていました。

しかし，今や遠く離れた小さい国の小さな町の出来事が，世界を動かしたり，私たちの生活に密接にかかわったりする時代です。まさに，「小さな国の時代」，「小さな地域の時代」のように思います。

ところで，空知国際理解教育研究会は，全道規模の研究大会の開催について，「いつかは」と思いつつも現実の課題ではありませんでした。しかし，私たちの教育研究は，教室のレベルで子どもたちの変容（成長）といった実践的な検証を経て，その教育的な価値を持つものであります。次代を生きる子どもたちが，瞳を輝かせ，全身の四肢を大きく羽ばたかせて，世界に飛び出す姿こそ私たちの目指すところであります。

研究団体の大小や会員の多少，地域の問題ではありません。「忙しい」とか「関係ない」とできない理由をあれこれとあげるのではなく，学校教育の役割をしっかりと見定め，北海道の片隅から，「子どもが主役」の教育実践を広く発信したいものです。

時折りしも新学習指導要領が示されたところです。知識基盤社会化やグローバル化一層進展する未来社会をたくましく生き抜く子どもたちの「生きる力」をはぐくむことは，まさに国際理解教育の原点であります。

第３０回の記念すべき研究大会は，時計台の鐘がなる道都札幌市において開催されます。
国際理解教育に熱い思いを共有する私たちが，惜しむことなくその実践を深め，互いに交流し，次代を生きる子どもたちの「生きる力」を育てていきたいものです。

理事会総会・研修会

第１８回 全国海外子女教育・国際理解教育研究協議会北海道ブロック大会，第２９回 北海道国際理解教育研究大会空知大会，第１４回 空知国際理解教育研究大会に先立ち，平成２０年度の理事会総会ならびに研修会が，全国海外子女教育国際理解教育研究協議会副会長・滝多賀雄様を迎えて，岩見沢市立教育研究所で行われました。

【会　次　第】

１．開会の言葉　　十勝地区会長　舟越　洋二
２．会長挨拶　　会　長　　後藤　　宏
３．来賓紹介　　会　長　　後藤　　宏
　文部科学省国際教育課教職員派遣係長　　小寺　和弘　様　＊会には欠席
　全国海外子女教育国際理解教育研究協議会副会長　　滝　多賀雄　様
４．自己紹介（理事・事務局員）
５．平成２０年度事業計画
　研究，事務局，庶務，広報，会計，組織　　各担当者
６．説明報告事項
⑴平成２０年度役員，事務局員，地区役員について　　白石事務局長
⑵第２９回北海道国際理解教育研究大会・空知大会について　　白石事務局長
　・課題別分科会担当などについて
⑶第２９回北海道国際理解教育研究大会・空知大会について　空知地区会長　大津外志男
⑷平成２０年度「派遣教員研修会・帰国教員報告会」の開催について　　白石事務局長
　・平成２１年１月９日（金）　札幌にて開催予定
　・開催に伴う各地区の協力体制支援についてのお願い
⑸今後の大会開催予定地

１十勝	２檜山	３札幌	４後志	５札幌	６胆振	７札幌	８上川	９渡島	10 札幌
11 網走	12 十勝	13 檜山	14 釧路	15 石狩	16 旭川	17 札幌	18 釧路	19 後志	
20 北見	21 胆振・室蘭	22 札幌	23 十勝	24 上川・旭川	25 釧路	26 石狩	27 胆振		
28 網走	29 空知	30 札幌	31 函館	32 上川・旭川					

７．審議事項
⑴会費納入方法の変更について　　川崎事務局次長
８．連絡・その他
　・全海研会費納入のお願い　　中村事務局次長
　・全海研補習校カリキュラム作成の参加について
９．次期大会開催地会長挨拶　札幌地区会長　山田　明子
10．閉会の言葉　　後志地区会長　徳光　　茂

審議事項として会計部から提案のあった会費納入方法の変更については，様々な意見が出されました。熱心な話し合いの末，基本的に会計部提案の方向に沿って考えますが，金額などを含めて再度検討することが確認されました。

その他，来年は本会の３０周年であり，その記念誌を発行すること，第３０回研究大会は札幌を会場として行われ，幼・小（外国語活動を含む）・中・高の授業を公開予定であることが報告されました。

空知大会 成功裡に終わる！

授業者の先生方はもちろんのこと，今回の研究大会の運営に携われた空知国際理解教育協議会の先生方，本当にお疲れ様でした。実り多い大会となりました。その授業と分科会の内容についてお伝えします。

公開授業の様子と分科会記録

【公開授業１】
小学５年　社会　単元名　「わたしたちのくらしと環境」
◇児　童　　長沼町立北長沼小学校　　５年　８名
◇授業者　　長沼町立北長沼小学校　　教諭　　加藤　康徳
◇記録者　　岩見沢市立岩見沢小学校　　教諭　　平山　麻美

落ち着いた雰囲気の中で始まった授業。おもむろに，ご飯がもられたお茶碗の絵が黒板に貼られる。
「お茶碗一杯のご飯を作るのにどれくらいの水が必要かな。」
と問いかける。これまでの既習事項や経験から必死に予想した子どもたちに，「２８７リットル」必要だということが伝えられる。予想以上の量に驚く子どもたち。この「２８７リットル」は「仮想水」とよぶということを確認した。
ここで主発問。
「お米以外の食べ物に必要な水はどれくらいなのか調べてみよう。」
お米以外の食べ物には，オムライスやカレーライスなど子どもたちが好きな食べ物が選ばれる。
環境省のホームページ内にある「仮想水の計算」を活用し，調べることになった。食べ物を作るために必要な材料の量をパソコンで打ち込み，「合計」をクイックすると仮想水が計算されて表示される仕組みだ。仮想水が計算されるたびに，パソコンの画面に向かう子どもたちの顔がぱっと明るくなる。「自分の分が終わったら，友達の分もやってみよう。」ということになり，どんどん取り組んでいく。
予想したよりもたくさんの水が使われていることがわかった子どもたちに，
「この水はどこからきているのだろう。」と問いかける。
色画用紙でつくったハンバーガーの教材と世界地図を活用しながら，日本がたくさんの食べ物を輸入していること，そして，その食材を育てるために必要な水も輸入していることを確認する。
ここで，まとまりかけた子どもたちの思考に，次時にむけて大きくゆさぶりをかける。
「たくさんの水を輸出している国には，水が豊かにあるのだろうか。」
アメリカ農場の資料を提示し，豊かではないという現実を知らせる。外国の農業について知りたくなった子どもたち。
「どうやって調べる？」
との問いかけに
「うちのお父さんなら知っているよ！」
との声。その子のお父さんはアメリカ人。アメリカで農業をやっていたが，アメリカでの農業に見切りをつけて，日本で農業をはじめている。
その子の一言で授業はまとまり，次時に向けて，子どもたちの思考は動き始めていた。

【授業別分科会】

第１分科会（領域：小学校社会）

◇授業者　長沼町立北長沼小学校　教諭　加藤　康徳

◇運営・司会者　滝川市立滝川第三小学校　教頭　織田　靖雄

◇助言者　北海道教育庁空知教育局生涯学習課義務教育指導班
指導主事　藤田　祐二
北見市立常呂小学校　校長　吉野　経夫

◇記録者　岩見沢市立岩見沢小学校　教諭　平山　麻美

〈授業者から〉

全世界的な水問題についての学習をした後，地元長沼に目をむけ，マオイの名水について学習を深めていくという計画ですすめている。マオイの水を守るために，自分たちには何ができるのか，ゴミ拾いをするなど，具体的に行動化していきたいと考えている。

本時は内容が多かったため，じっくりと考える時間を確保できず，資料を提示することになってしまったが，子どもたちはよく頑張っていた。

〈質疑応答〉

・仮想水から世界とのつながりを考えたところが素晴らしい。この１時間を２時間かけて行えたとしたら，どこに時間をかけたか。
→実際の水の量を用意するなど，もっと具体的に行いたかった。プロジェクターなどを使ってビジュアルに訴えることもできた。

・なぜバーチャルウォーターを取り入れたのか。
→１学期に食料の輸入について学習した。食料の輸入には水も循環していることを教えたかった。

・たくさんの地元の材料が盛り込まれている。水に特化してもよかったのではないか。
→世界から入っていくか，マオイ（地域）から入っていくかで迷ったが，いろいろ取り入れながら深めることを考えた。

〈助言者より〉

＊藤田　祐二　指導主事

教材研究に熱心で，社会科の力を高めようという熱いものを感じた。様々な教材教具の活用も印象深かった。子どもたちは強い緊張感の中でよくがんばっていた。

子どもたちの生活と結びつきをもたせ，必要感，実感をもたせることが大切だった。また，仮想水の扱い方では，数字をいれるだけではなく，調べたことをもとに考えて，表現していくことが大切である。

ペアやグループ活動を取り入れるなど意見交換をし，学習形態を工夫してもよかった。

国際理解のフィルターにかけることにより教科の目標を忘れてしまう危険性がある。他教科とつながりをもたせながらも，教科の目標の達成状況は確認していく必要がある。

＊吉野　経夫　校長

前時までの３時間で，子どもたちにどれだけ水の大切さがおちていたか，また導入のお米にかかる仮想水の説明で，子どもたちから「すごい！」が引き出せるかどうかがポイントだった。そこにたっぷり時間をかけてほしかった。

視点を「水」にあてたところ，地域の題材を取り入れながら，一つの単元を作って，実践されているところが素晴らしい。

【公開授業２】

小学３年　総合　単元名　「日本の伝統文化を学ぶ」

◇児　童　　岩見沢市立幌向小学校　　３年３組　２７名

◇授業者　　岩見沢市立幌向小学校　　教諭　　高橋　一徳

◇記録者　　岩見沢市立豊中学校　　教諭　　大橋場芳枝

「正座・黙想・礼」と元気よく子どもが言い，しっかりとした礼で授業が始まる。教師の発問により，前時で学んだ剣道の基本的な動きや礼儀作法（「礼の仕方」「足さばき」「竹刀の振り方」）を確認する。

外部講師の大学生による「切り返し」「面打ち」「あいがかり稽古」の実演を間近で見て，大きなかけ声や打つ音や床に響く揺れを感じた子どものつぶやき「地面がゆれたよ。地震！」と真剣な眼差しの子どもたち。ここで一気に関心・意欲がひきつけられた。

本時の課題「グループごとに剣道のひみつをさぐってみよう」が提示され，子どもたちは５つのグループ（グループ毎に数名の大学生の指導者）に分かれ，ゲームや作行業を通して，仲間どうしや大学生とコミュニケーションをとりながら，生き生きと課題解決に取り組んでいた。

○竹刀作りグループ

４本の竹を使って，実際に竹刀を組み立ててみよう

○竹刀振りグループ

竹刀ふりゲームをしてまっすぐふってみよう

○防具装着グループ

実際に防具をつけて重みを体感してみよう

○足さばきグループ

すり足で足の使い方をマスターしてみよう

○集中力アップグループ

相手の気持ちを感じ取りゲームをしてみよう

グループごとに学習の振り返りを行い，全体で発表し，交流した。

「つかが豚皮だと言うことがわかった。」

「左手に力を入れて振ることがわかった。」

「防具をつけると暑い，重い。」

「足を床から離さないようにすることがわかった。」

「集中力アップゲームが楽しかった。」

「他の活動もやってみたい？」の問いかけに大反響。次時につながる。

最後も元気なかけ声の「正座・礼」で終わった。

【授業別分科会】

第２分科会（領域：小学校総合的な学習の時間）

◇授業者　岩見沢市立幌向小学校　教諭　高橋　一徳

◇運営・司会者　岩見沢市立志文小学校　教頭　大野　伸仁

◇助言者　北海道教育庁十勝教育局生涯学習課義務教育指導班
指導主事　青木　順一
江別市立上江別小学校　校長　中村　一治

◇記録者　岩見沢市立豊中学校　教諭　大橋場 芳枝

〈授業者から〉

教材化については子どもたちの「日本の伝統」のイメージマップからと地域でも剣道や太鼓が行われていることもあり，「剣道」「太鼓」を取り上げた。また，間近に剣道を見たことがなかった子どもたちに見せた。本時の２つの目標「剣道の特性に興味をもち，意欲的に体を動かす」「グループ活動で自分の考えを出しながら協力する」は，達成できたと考える。授業では３つの視点「子どもの反応をうまくひきだせるよう」「できたときにほめる」「時間調整」をもち，各グループを回って指導した。

〈質疑応答〉

・教師の特技を生かした日本伝統文化を伝える授業で，生き生きと活動する児童の姿が見られた。大学生とのコミュニケーションもよくとれていた。
・剣道の礼議‥相手をたたくということから予め礼をする。礼儀を身につけることについて，子どもによく伝わっていた。
・岩見沢市の大学生交流事業についての質問
→地域指導実践プログラムの一つ
・単元の中で考えた時に，他国文化との比較を取り入れると，国際理解・伝統理解が更に深まるのではないか。
・日本伝統文化で「礼儀」を考えるのなら，他の〇〇道も礼儀を重んじることに触れても学習が深まるのではないか。
・導入の大学生の「打ち」で興味・関心をひきつけたよい展開であった。
・「かけ声」の指導であまり出てない子どもについての指導はどう考えていたか。
→（授業者）おなかから声出しすることによって，打ちが強くなることを感じればいい。楽しくすることを重点にした。
・上靴の整頓もきれいにされていて，躾の大切さや剣道に取り組む姿勢や礼の美しさがちゃんと子どもに伝わっていた。細かく配慮した指導がされていることに感心した。礼してもどるまでが礼であり，感謝の気持ちが込められている意味あるものであることも伝えるともっとよい。

〈助言者より〉

＊青木　順一　指導主事

自国の伝統文化を学んでから国際理解を広げるという流れの始めの授業であった。

本時については，２つ目の目標を「剣道の体験を通して，課題をみつけさせる」として，グループだけではなく，個人の課題をくみあげるともっと深まる。

話し合いの場面で意図的に，グループの中での意見交流をもつ時間を設定できるとよりよかった。

次時は「他の体験をする」ということで，子どもたちどうしが教え合うことにより，意見交流の深まりが期待できる。

＊中村　一治　校長

幌向小学校の総合的な学習のテーマに沿った学年ごとのねらいがあり，指導計画が素晴らしい。剣道という教材の発展性を発見できた授業であった。

「子どもの目がいい。」とても意欲的に活動をしていた。

授業の流れとして，課題－活動－まとめをきちんとやっていた。個人やグループで書いてまとめる作業を入れることは効果的であった。身近なものを見つめ直して，世界との比較で広げていく→国際理解教育

国際理解教育の授業づくりを進めるために

〇どんな力を身につけさせたいかを明確に。
〇地域素材を活かす。
〇活動の中に，収束と拡散を入れる。
〇内容を地域だけではなく，地球的規模に広げていく。
〇教科との関連性をしっかりと位置づける。

【公開授業３】

小学２年　英語活動　単元名　「いくつありますか」　－ 子どもの祭り －

◇児　童　　岩見沢市立第二小学校　　２年１組　２０名

◇授業者　　岩見沢市立第二小学校　　教諭　朝倉　秀明
ALT　エマ・ホワイト
ACT　越智さん・西さん・鳴海さん

◇記録者　　美唄市立東中学校　　教諭　櫻井　貴幸

〈導入〉

電子黒板を使用し，既習事項の各国の祭事（お盆・ハロウィーン・神社祭・イースターに関する復習を行った。

写真の提示でスムーズに振り返ることができ，どのようなお祭りか子どもたちも更に理解を深め，十分な関心を引きつけていた。授業へ参加する気持ちを高揚させることができていた。

〈展開〉

・会話表現として新文法の導入を行った。モデルリーディング（HRT と ALT）による How many ～ do you have? を全員の前で演じた。

・全児童で repeat，個人指名で２名に発音させ，児童間による練習。５人の先生方で活動を支援した。最後におさらいとして再度全員で repeat した。

・次の段階として，モデルでその後の活動で実際使用する How many （祭事名） cards do you have?を演じた。この段階では I have 7.のように質問に対して数字を答えれば良いことを確認した後，ペア練習（５人のサポート）。

・全員を１箇所に集め，指名した児童数名に習ったばかりの会話を披露してもらった。

◇エッグハント活動

・ルール説明で時間内に１０個のカプセルに入れられたカードを集めることを確認。

・子どもたちが勢いよく会場のあちらこちらにちりばめられたカプセルを楽しそうに集めていた。

・全員がカードを集めるまで，先に集めていた児童は座席の隣りや前後のペアで会話練習。先生全員で支援。

学習課題

《お祭りカードを集め，英語で数を尋ねる言い方を使ってみよう》

・４つに別れたお祭りブースに行き，自分がそこのブースのカードを何枚持っているかを教師に質問され，答える活動。

・４人の教師（ALT と ACT）がそれぞれ担当して質問し，先に終了した児童と HRT が戻って来た座席でおさらいするという役割分担。

・本時のねらいと活動を振り返り，確認した。

〈まとめ〉

・いつも行っている英語の歌を踊りを交えて全員で楽しく歌った。

・上手に活動できたことに賛辞を送り，次時への意欲をもたせていた。

［授業の雰囲気］

児童の動く場面が多かったが，ゲーム的要素があり，また会場の掲示物やグッズなど事前の準備も手が込んでいた。こうした工夫をすることは英語を自分で使ってみたいという雰囲気・気持ちとなった児童を積極的に動かすという実践を改めて印象付けた授業であった。

【授業別分科会】

第３分科会（領域：小学校英語活動）

◇授業者	岩見沢市立第二小学校	教諭　朝倉　秀明
		ALT　エマ・ホワイト
		ACT　越智さん，西さん，鳴海さん
◇運営・司会者	美唄市立西美唄小学校	教諭　福士　晶知
◇助言者	北海道教育庁学校教育局義務教育課指導主事　輕部　恭子	
	札幌市立拓北小学校	校長　継田　昌博
◇記録者	美唄市立東中学校	教諭　櫻井　貴幸

〈授業者から〉

＊朝倉教諭…日常の英語活動としては，音楽等で楽しみ，コミュニケーションでつなげていく，ということを意識して行っている。今日の授業は文化的要素を多く入れた。

＊エマ先生…とても良いゲームを取り入れたと思った。いつもはもっと速い発音もできるので，緊張していたように感じた。

〈質疑応答〉

・運用面～今後のカリキュラムでは低学年８時間，高学年３５時間の予定。

・ACT の活用～低・中・高学年に各１名の配置。

・本時の内容・難易度について～授業は時期的，系統性を持たせて計画した。目標は高かったので，今後整合性をもたせてカリキュラムを改善していきたい。

・How many~?を導入したことについて～英語活動としてこの使用にこだわりたかった。結果 TT の活動に時間を割きすぎたと思う。

・中学校への繋ぎのためには How many ~ do you have?まで必要なのでは～確かに会話としては，そこまで言わなければ不自然であるが，本時は数を答えることがゴールだったので省略した。

　ゴールがあればそれに近づけば成功。それが如何にしてコミュニケーションに繋がっていくのかが大切。子供同士の活動が多いと良い。

・レベルの高い活動や ACT の活用に関心。

・教師間の研修～授業の前には必ず HRT, ACT, ALT 間で打ち合わせを始めとしたコミュニケーションを持つように心掛けている。またそれぞれが普通に教室にいる雰囲気づくりをしている。英語活動は与えられるものではなく，自己表現の１つの方法として行いたい。

・英語活動に携わることを困難として捉えるのではなく，先生方も「英語の壁」を破り，子どもたちに「楽しかった」と言ってもらえる準備・勉強をしていかなくてはならない。

〈助言者より〉

＊輕部　恭子　指導主事

　第二小学校は拠点校として取り組んでいただいており，今回も十分それを意識して授業していた。これを他校には参考にして欲しい。授業はスキルだけではなく，文化理解，コミュニケーション，発音，全て関連し合っている。１つの柱だけが太くなってはいけない。これはコミュニケーションの素地作りである。英問英答だけではなく，英語で質問されて日本語でも答えようとする気持ちを育てることが肝要である。そして低学年ではフルセンテンスでなくてもジェスチャーだけでも良い。機会があれば英語圏外の国々の行事にも注目させることが必要。文法は繰り返しの中で覚えていけば良い。まずコミュニケーションをとろうとする気持ちをもたせなければならない。課題に対する答え以外のあいづちなどをいえることが大事。CD や資料，電子黒板活用等の補助を合わせ，英語ノートを活用して欲しい。

＊継田　昌博　校長

　札幌では学校数に対する ALT の人数がまだまだ不足しているので，今後の英語活動は主に HRT ができるよう計画が進んでいる。授業はインプットがアウトプットより多いことが確認できればバランスが良い。小学校ではやろうとする態度を育てるべきである。自分・相手双方を見つめ，気を遣って活動することができるようになるからである。それからコミュニケーションする力やスキルを上げていけば良い。授業は最終的に相手を尊重しつつ，友達同士で会話できることが大事であり，常に教師集団は協力し合い，何ができるかを研修すべきである。先進的に取り組んでいる学校を参考にし，また周囲の人材・教材を積極的に活用していただきたい。

【公開授業４】

小学５年　総法的な学習の時間　単元名　「国境なき　こし団」

◇児　童　　岩見沢市立北真小学校　　５年１組　３３名
◇授業者　　岩見沢市立北真小学校　　教諭　　越山　真史
◇記録者　　夕張市立清水沢小学校　　教諭　　柏木　哲也

越山教諭がカンボジアの僧侶の服装で登場。強烈なインパクトによって，早速，子どもたちの関心が惹きつけられていた。また，同時にゲストティーチャーの池田さん（外務省 NGO 相談員）を紹介し，今日の学習のめあてを確認した。

本時は，自分たちの活動が，本当にカンボジアで役に立つかということについて「伝える班」の行動計画の発表から始まった。静粛した中で，子どもたち一人ひとりがしっかりと発表を聞いていた。発表は，

・校内ではポスター，給食のときに放送する。
・校区内チラシを配る。
・市内にはポスターを貼る。
・ラジオで放送する。
・お店のトイレなどにポスターをはる。

という内容で，発表を聞いている子どもたちは，早速質問や意見を考え始め，発表班は，質問の答えを予想し始めた。

最初は個人で考え（５分），その後グループ内で交流し（５分），質問や意見をまとめていくといった流れで行われた。質問や意見をするグループは，活発に意見交流をして，質問や意見をまとめていた。発表グループは，予想される質問や意見をしっかりと考えていた。また，どのグループからも，発表の仕方や話し合いの進め方が普段からしっかりと確立されているのがわかった。

質疑応答では，

Q. 日本人にカンボジアのどんなことを伝えるか。
A. カンボジアの困っていることを伝える。
Q. 困っていることだけを伝えて意味があるのか。
A. 歴史・人物・様子などのことを伝える。
Q. 平和で豊かな暮らしは，どのようにしたらできるのか。
A. 池田さんに相談をして答える，といったように，鋭い質問が飛び交ったが，発表グループはそれぞれの質問に丁寧に，的確に答え，また，その場で答えられなかった質問については，ゲストティーチャーの池田さんに相談して答えを出すといったように，冷静にかつしっかりと対応することができていた。

その後の意見発表では，

・やることを分担してやると早く終わるのでがんばってください。
・ポスターをはるのはいいと思う。岩見沢市外もいいと思う。
・よい事なのでこれからも活動を続けてほしい。
・校内や市内にポスターをはるなら，校区内もはればいいと思う。
・ラジオは聞いている人がわかりやすくてよい。

などといったような内容で，特に，子どもたちによる建設的でポジティブな意見やアドバイスが，発表する子どもたちの意欲を喚起することにつながっていた。発表グループの子どもたちは，アドバイスに頷き，うれしそうな表情をして聞いていた。

また，発表グループは，自力で質問の答えを考えながらも，困ったときには相談できるゲストティーチャーという心強い味方がいるという安心感の中で，学習を進められていたというのも見所の一つであった。

最後に，越山教諭の「よりよい活動に向かっているでしょうか。」という問いに対しての児童の挙手，「よいところは，調べる班や集める班の活動とつなげて活動しているところです。」という誉めの言葉，ゲストティーチャーからの「これからも応援していく。自分たちからのアピール文を今まで協力してくれた方に送るとよい。」というメッセージ，そして，参観者へのペットボトルのキャップ・使用済み割り箸・リングプルの収集の協力のお願い等，次なる行動化へと繋がる授業となっていた。

【授業別分科会】

第４分科会（領域：小学校総合的な学習の時間）

◇授業者　岩見沢市立北真小学校　教諭　越山　真史

◇運営・司会者　岩見沢市立北真小学校　教諭　佐野　聡恵

◇助言者　北海道教育庁上川教育局生涯学習課義務教育指導班
指導主事　田中　孝二
蘭越町立蘭越小学校　校長　徳光　茂

◇記録者　夕張市立清水沢小学校　教諭　柏木　哲也

〈授業者から〉

子どもたちに自信をつけさせたい，視野を広げさせたい，挑戦させたい，たくましい人間に育てていきたいとの願いで取り組んだ。特に，知サイクルと銘打って，子どもたちの「問い・思い・願い」を大切にした。その結果，地球市民としての意識・自主性・コミュニケーション能力等が高まった。今後は行動力・実践力を育てていきたい。

本授業は,「伝える」「調べる」「集める」「交流する」の４つのテーマに基づき，ゲストティーチャーからアドバイスをもらいながら，自分たちでできるよりよい国際交流活動を考えていく学習。仲間意識をもって考え，活動にプラスになる意見が出た。ゲストティーチャーは，子どもたちの意欲化につながり，発表班にとっては，相談役として頼りになる存在となっていた。今後は，自力で活動していけるように他のゲストティーチャーを招いたり，様々なサポートをしたりしていきたい。

〈質疑応答〉

⑴世界に目を開く教材化の工夫について

◎途上国（カンボジア）を教材に扱う時，同じ年代の子どもたちをどのような思いで育て，どのように子どもたちに捉えさせているか。

⇒途上国を扱う時，困難（マイナス面）なところから入ると上から目線で見てしまうことが懸念される。その国のすばらしさを先に教えた中から課題をもたせるとよいのではないか。

⇒結論はでなくても,「よい生活」とはどういうことか話し合わせると更に深まるのではないか。

◎途上国としての見方からスタートしているが，指導計画の中のどこで，子どもたちの目線が変わると予想されるか。

越山教諭……導入時は，日本に生まれてよかったという反応。しかし，食糧自給率の話，新聞の記事などの学習を通して先進国が幸せであるという考えから変わってきている。全ての学習を通した中から気付いてくれたらよい。

◎ゲストティーチャーのネットワーク作りはどのようにしているか。また，効果的であることはわかったが，多すぎて消化不良にならないか。

越山教諭……いろいろなイベントに参加し，団体に所属してネットワークを作り，協力してくれる人をほぼ無償で招いている。たくさんのゲストティーチャーは消化不良かもしれないが,子どもたちは興味をもって学習している。

⑵コミュニケーション能力の育成について

⇒国際理解教育では，その国の話を聞こう・伝えようとすることも大切。外国のものを土台にするだけでなく,日本のよさを発信するといったように発展的にできたら更によい。

⇒本授業では，子どもたちが認められた雰囲気の中でコミュニケートができている。子どもたちは,更に考え方を深めることができるのではないか。

〈助言者より〉

＊田中　孝二　指導主事

子どもたちの願い・思い・問いに基づいている学習が優れている。多くのゲストティーチャーとの対話がキーワードになっている。学習の中でたくさんの気づき・地球市民としての自覚が見られた。課題の設定→情報の収集→整理・分析→まとめ・表現が発展的につながっている探求的な学習課程が優れていた。学習の中で，自己決定の場がある，自己存在感を高める，共感的理解をするという生徒指導としての機能が活かされていた授業だった。

＊徳光　茂　校長

見通しをもった総合の計画に基づいて学習に取り組んでいる。ネットワークを活かしながら，こういう子どもに育てたいという先生の思いの中で授業が成立している。遠慮なく子どもたちが意見を言える環境の中で子どもたちが新たな課題をもつことができていた。子どもたちの課題意識，コミュニケーション，待ちの姿勢を大切にしていたので，今後，地球人としての意識をもとに，考えていけるだろう。

【公開授業５】

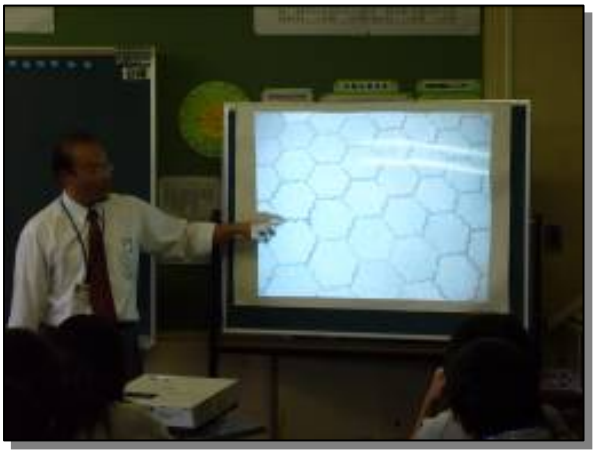
中学２年　数学　単元名　「第４章　平行と合同から」

◇生　徒　　岩見沢市立清園中学校　　２年Ａ組　３３名
◇授業者　　岩見沢市立清園中学校　　教諭　　小泉　　寧
◇記録者　　夕張市立緑陽中学校　　教諭　　山下　理志

導入では，OHC を使い，身近な場所から世界各地で使われている「いろいろな形」の写真を投影して積極的にどこの形かを考えさせた。また，正六角形が自然界や世界に「蜂の巣」や「雪の結晶」や「道路」などで存在していることを説明した。特に，「道路」は「図形が敷き詰められている」ことに着目させた。展開では，「正六角形以外の正三角形，正方形，正五角形などは，平面をすきまなく敷き詰めることができるのだろうか？」という課題で，いくつか用意された図形の中からすきまを埋めることができる図形を班の中で話し合いながら予想した。その後，埋められるかどうかを実際にいろいろな図形を敷き詰めてみて確かめた。そして，すべての四角形で敷き詰めることができた理由を生徒に考えさせた。

最後に，正六角形の敷き詰め（ハニカム構造）が，世界的に利用されて役にたっていることを紹介し，図形への関心を高める楽しい授業であった。

視覚に訴える教材の工夫や班単位による話し合いを通したコミュニケーション能力の育成を目指した活動があり，生徒が興味をもち積極的に取り組んでいる授業であった。



【授業別分科会】

第５分科会（領域：中学校数学）

◇授業者　　岩見沢市立清園中学校　　教諭　小泉　　寧
◇運営・司会者　　芦別市立緑ヶ丘小学校　　校長　沼田　　清
◇助言者　　北海道教育庁石狩教育局生涯学習課義務教育指導班
指導主事　新居　雅人
標津町立標津中学校　　教頭　飯田　輝雄
◇記録者　　夕張市立緑陽中学校　　教諭　山下　理志

〈授業者から〉

導入と最後で国際理解的な視点→図形の導入（形についての興味・関心を！）によって世界の色々な形で興味を高めた。まとめの段階で紹介するものをすべて紹介できなかった。

〈質疑応答〉

・教材を決め細やかに準備されていた。「国際理解色」を教科の中に取り入れることは難しいことを感じた。
・生徒がすごく食いついている様子が見られた。一生懸命を取り組んでいた。
・数学で国際理解を取り入れたのは素晴らしい。理科では異文化理解を取り入れることはできるが，数学でよく取り入れた。生徒の食らいつく様子が素晴らしかった。教材の準備（写真や図形など）が素晴らしかった。コミュニケーション能力に関しては，ユビキタスでなくてはならないという点で，「班活動」という単位で気兼ねない雰

囲気でディスカッションできていた。角に一つの角が集まるところを考えさせることができたら良かった。凹四角形がなぜできなかったのか，５角形がなぜできたか。
・プロジェクターで写真等を投影していて，生徒の食いつきが良かった。
⇒中２で「等式変形」…摂氏とカッシを使っている。「関数」…岩見沢市の人口の減少→３０年後はどうなる？ＣＯ２の濃度についてのグラフを１次関数的に見るとどうなのか？　数学のＸや図形（建物の図形）は万国共通であるので国際理解の視点をとり入れやすい。凹四角形については，誰も予想できなかった。正５角形については，なぜできないのかをやりたかったが，時間の関係上省略した。敷き詰められた中から，平行線が見つかることを今後の授業で取り入れていく予定である。
・人口統計や…国際理解を念頭においてやっているのか？
⇒自分の身の回りのもの（岩見沢市の人口など）が国際理解を考えるきっかけにしている。数学的にやっている。人口によりどのような変化が回りに起きるのかを考えさせたりしている。

⑴世界へ視野を広げる教材化
・「世界と日本の違い」に視点を置いたものが多かったが，「違う国なのに『同じ図形』を使っている」という視点が国際理解の教材化をできると感じた。
・「話す・聞く」で国際理解を出せるが，総合の中でやる国際理解と教科の中で行う国際理解を組み合わせることができたら，より効果的にできるように感じた。各教科間の連携ができたら…どうしても単独での授業になってしまう。

⑵コミュニケーション能力の育成について
・数学的には「ヒラメキ」が重要だと聞くが，社会科では今までの資料から引っ張り出してくることが多い。予想でどうしてそう考えるのか？という部分をもう少し広げていくところを見たかった。
⇒ヒラメキは厳しく，単元の後半で知識がある状態でそれを活かして答えることはできるかもしれない。
・グループ学習では「何を話し合うのかの具体性」がかけるとあまり活発にならず，失敗する傾向にあるが，図形を出しながらのグループ学習だったので話し合いが活発に行われていたので良かった。
・班で意見を一つにまとめさせたところがコミュニケーション能力の育成に繋がった。一つの頂点に集合させる部分で話し合い，凹四角形を作ることができた生徒に「敷き詰めることができたコツ」を聞けば，もしかしたら「一つの頂点に集合させる」という意見が出たかもしれない。
・頂点に色をつけておくと「一つの頂点に集合」していることを発見できたかもしれない。
・図形の精選をしておくと，発見できたのではないか。

〈助言者より〉
＊新居　雅人　指導主事
研究授業は挑戦する意欲が必要！うまくいくこともあれば，失敗することもある。
数学で図形に挑戦しているのは素晴らしい。生徒の食いつきが素晴らしい。学力も良いのでは？　実物投影機が最後のみんなの図形を敷き詰めにつなげたのが良かった。
予想を覆す図形の精選をできていたのが良かった。「直感だから理由は言えない」といった生徒がいた。多数決で決めていた班があった。○×を決める際に「理由交流」ができると「コミュニケーション能力」に繋がっていた。
図形の精選が必要だったと感じた。（わかりきったものはなくてもよいのではないか。
日本でも国際理解教育の視点をもう少しやっていく必要があると普段感じている。①異文化理解　②自国理解　③コミュニケーション能力の育成。最近は，④表現・発信　⑤情報を精選・活用する力　が必要になってきている気がする。今日の図形の授業から，色々な図形を見ていた時に，国際理解で何かにつながっていけばよい。
＊飯田　輝雄　教頭
教育課程の編成→編みこむ→絵や写真が数学だけでなく，美術や理科で使われたりすると，多教科との連携により（廊下にはるなど），「日常化」できていくと生徒の意識（国際理解の視点）を変えていくことができるのではないか。
モロッコのアラベスクなどは，埋め尽くす＋芸術性に気づくことができるようになってくるとよい。
グループの活動・編成についての話題が国際理解では出てくる視点である。国際理解では「変化に対応する能力」が注目される。今日の図形⑤⑥は，これに当たる。「自力解決」で発見したことを「他の生徒に教える時間」があると，コミュニケーション能力の育成に繋がったのではないか。
「変化に対応する能力」として，①関連性・②多元的な視点・③変化の視点（固定概念を覆す）先生方の教材化の工夫，②目を見て挨拶する（外国など）→「外国ではそうなんだ」という点から知的好奇心を広げていくことができるのではないかと感じた。

【公開授業６】

中学２年　英語　単元名　A Park or a parking Area?

◇生　徒　岩見沢市立光陵中学校　　２年４組　３８名

◇授業者　岩見沢市立光陵中学校　　教諭　　山崎　史朗

◇記　録　奈井江町立奈井江中学校　　教諭　　曽根　秀彰

“Who is he?” “I think he is Mr.Obama.”
“Where is he from?” “I think that he is from America.”

普段は文法を教えてから練習をするというJTEであったが,ALTとの授業では英語で導入し，会話を推測させることにとりくんでいる。生徒の理解を促し，主体的に参加させるためである。なるほど，生徒は，スクリーンに映し出されたオバマ氏やベッカム選手などの情報について，時にユーモア，身振り手振りを交えて軽妙にかけ合う教師に乗せられ，生き生きと２人の教師の問いかけに英語で応えようとしている。

次に，ワークシートを使い，パターンプラクティスを行う。自分の考えを書き入れ，ペアワークで友だちの考えを聞くよう促す。いつも行う Writing 活動，Speaking 活動であるが，生徒は一生懸命英語を使おうとしている。身近なことを英語で表現しようとする生徒と机間支援を行う教師。

続いて，文法「that節」についてALTが解説し，JTEが補足説明をした。生徒の理解を促そうと，吹き出しを使うなど，視覚的にも訴えている。

本時の学習の柱では「カナダと日本の交通システムの違い」であった。最初に，カナダの交通安全の CM 映像を見せたが,「カナダでは自転車でもヘルメットをかぶる」ことに納得する生徒，驚く生徒がいた。

その後，映像を活用しながら交通システムの違いについてのクイズを生徒に出し，生徒はグループで話し合った結果をホワイトボードにそれぞれ解答した。生徒は集中し，興味をもち，時にはカナダが車社会であるという驚きつつ，日本とカナダのシステムの違いに感心しながら理解を深めていた。時間が足りず，残念ながらそのシステムの違いを I think that ～．につなげて生徒が発表する場面等はなかったが，次時以降の展開が楽しみな授業であった。

ALT と JTE が役割を逐次交代し，かけ合うことでお互いの持ち味を生かす，興味深いティームティーチングであった。また，教科書の内容を膨らませ，異文化に触れさせることで，知識を広げ，国際理解につなげる意味でも素晴らしい授業であった。

【授業別分科会】

第６分科会（領域：中学校英語）

◇授業者	岩見沢市立光陵中学校	教諭　山崎　史朗
◇運営・司会者	滝川市立開西中学校	教頭　鈴木　利彦
◇助言者	北海道教育庁渡島教育局生涯学習課義務教育指導班	指導主事　堀田　裕之
	札幌市立札幌中学校	校長　山田　明子
◇記録者	奈井江町立奈井江中学校	教諭　曽根　秀彰

〈授業者から〉

＊山崎教諭…ALT とディスカッションを重ね，Team Teaching のスタイルを見直した。普段は文法の教え込みになりがちであるが, ALT と行う週１回の Team Teaching では，JTE と ALT の会話などから生徒が推測できるようにしている。構成は JTE が考え，詳細の部分は ALT が担当した。

＊Caroline ALT…ALT のこれまでの「テープレコーダー代わり」から一歩踏み込み，ALT ができることや可能性を考え, I think ～ ．を使った導入で生徒に推測させるようにした。

〈質疑応答〉

・Team Teaching→役割分担や掛け合いがよく，生徒とのやりとりもよくできていた。

・授業の進度→英語科そのものが国際理解であるが，異文化理解のエッセンスを入れると時間が足りなくなる。年に数回程度，教科書に出てくる題材を発展させる形で行うことは可能である。ゆったり導入すると，教科書は終わらないので，指導の中で文法指導をしてから練習することが多くなる。

・授業の中での that 節の指導→I think ～ ．だけでなく, hope などの言葉を広げることもできる。クイズの場面で，できれば”I think that Canada is safe.”など生徒に言わせると，運用としてより良くなるのではないか。「ALT に言う」という体験は生徒にとって特別な経験である。

・文法事項の指導→きちんと教えるところは教えないと表現の時に困る。文法なのか，意味なのか。新学習指導要領では「意味ある文脈の中で文法を教える」ことが英語指導の中で謳われている。

ただ何となく意味が分かればよい，ということではなく，that の後のクロース（節）になったところも言わせるように指導する方が表現する力がつけられるのではないか。

〈助言者より〉

＊堀田　裕之　指導主事

一生懸命相手の話を聞く態度，何かを伝えようとする姿勢がコミュニケーションにとって重要である。

環境づくりも教材化の一つである。授業では SWITCH TEAM TEACHING を行ったが，体験を通して感じさせ，推測させ，考えさせ，理解を深めることが，異文化理解にとって大変価値がある。

コミュニケーションに対する不安を取り除くこと。Classroom English や TT でのやりとりで，コミュニケーションを促進する。

単元の目標を踏まえながら国際理解の内容を取り入れる。教科の目標を第一に，異文化理解を考える。

＊山田　明子　校長

小学校での英語活動を通じて，子どもたちが英語に慣れ，中学校の ALT との TT でもそれが生かされている。文法指導において，文法が自分の考えを表現するための基礎となる。時にはしっかりと教えることが必要である。

ALT の授業で，子どもたちがいろいろなアプローチで学習できる可能性が広がる。英語そのものが異文化であり，少ない授業時間の中，ALT の力を借りながら，世界に目を向けさせることが十分できる。「交通」という切り口を通して，子どもに世界に目を向けさせる授業であった。どういうものの考え方をできる子どもに育てるかを考え授業することが大事である。

”Open mind”は教師にも子どもにも, 国際理解教育にとって必要である。

【公開授業７】
中学３年　英語　　単元名「20th Century Greats」
◇生　徒　岩見沢市立緑中学校　　３年Ｃ組　３４名
◇授業者　岩見沢市立緑中学校　　教諭　　鈴木　一朗
◇記　録　岩見沢市立緑中学校　　教諭　　桐渕　則行

「差別はだめだ」,「他人を思いやる気持ちが大切」等は，小さいときから教えられ，頭ではなんとなくわかっていることである。

しかし，２０世紀の偉人で，公民権運動で活躍したキング牧師をとりあげることで，世界の差別に目を開かせ，新たな気持ちで身近な友だちへの接し方，学級や社会におきかえて考えることができるという視点から授業は構成されていた。

授業は，キング牧師のフリップを提示し，有名なスピーチVTRを流すところから始まった。並行してプリントが配付され，グループワークが始まった。授業者は,「この人はどんな夢をもっていたのだろう」と投げかけた。生徒は，一心にキング牧師の英文スピーチを日本語訳していた。時折聞こえてくる「I have a dream.」のフレーズに後押しされながら何とも言えぬ良い雰囲気でグループワークは進んだ。授業開始１０分ほど経過したころ，作業を止め，VTR を全員で鑑賞。生徒たちの表情からは，キング牧師の名演説の意味がうっすらとわかり始めたことが感じられた。

その後，生徒はALTによるキング牧師に関する５つの発問にT or Fでリズム良く反応した。生徒はプリントを裏返し，本日の目標である関係代名詞を使った英文作成に取りかかった。最終的に授業参観者を含めたすべての人を対象にしたインタビューが始まった。生徒たちは，いきいきとした表情でお互いにインタビューし，初めて話す大人たちに自作の英文で話しかけた。この取り組みは，コミュニケーション能力の向上を図るための授業工夫であり，本日一番の盛り上がりを見せた。

その後，スティービー・ワンダーに関する設問に触れ，スティービー・ワンダーは，キング牧師の誕生日を祝う歌をつくったことを告げた。そして，日々の授業で歌っている英語の曲である「I just called to say I love you」を全員で歌った。ここで授業者は，いつもの授業で歌い続けてきたこの曲の歌詞は，ただ相手のことを好きだという意味だけではなく，アフリカ公民権運動の父ネルソン・マンデラ氏を称える意味を含んでいることを告げた。

ある生徒は，授業の振り返りシートに，スティービー・ワンダーのつくった曲の歌詞の意味をもっと知りたいとコメントしていた。この授業は，生の映像やインタビュー形式のゲームを取り入れるなどたくさんの工夫が見られ，生徒の興味関心を大きく揺さぶる斬新さが見られた。

【授業別分科会】

第７分科会（領域：中学校英語）

◇授業者	岩見沢市立緑中学校	教諭　鈴木　一朗
◇運営・司会者	美唄市立東中学校	教頭　小川　　勉
◇助言者	北海道教育庁留萌教育局生涯学習課義務教育指導班	指導主事　遠藤　直俊
	苫小牧市立緑陵中学校	教頭　坂元　　修
◇記録者	岩見沢市立緑中学校	教諭　桐渕　則行

〈授業者から〉

日頃の授業で，英語は，平和のために勉強するものだと伝えている。本単元は，２０世紀の偉人について触れているが，公民権運動の先駆者であり，世界的に有名なキング牧師を題材にすることで，強く人権にアプローチできると考えた。本時は，文法事項である接触節関係代名詞の学習をすべて終えているため，単元のまとめの意味も含めて，ワークシートを２面用意した。内容的には，キング牧師の英語スピーチの和訳，関係代名詞を使った問題，そして英語による授業評価などボリュームがあったが，日頃の ALT のサポートで英作文については成果をあげてきているので踏み切った。

〈質疑応答〉

・インタビューゲームにおけるコインは，どのようにあつかっているか。
　⇒コインは，評価に入れず，生徒の励みとして行っている。
・キング牧師のスピーチ VTR の出所はどこか。
　⇒インターネットで検索し，入手した。
・授業の副教材として何か使っているか。
　⇒特に使っていない。

〈助言者より〉

＊遠藤　直俊　指導主事

教材の選定は評価できる。キング牧師のスピーチだけではなく，スティービー・ワンダーとの関わりを盛り込んだことは，国際理解教育の視点からも価値がある。またキング牧師のスピーチの読解は「まとまりのある英語学習」につながる画期的な取り組みと評価できる。本時の場合，VTR を流した後 ALT がゆっくりと同内容のスピーチを話してプリント学習につなげることでより効果が期待できたのではないか。また本時の教材は，英語を通して外の文化を深め，人類の幸福につなげていくという点から，道徳との関連性があり評価できる。授業全体を通して，英語を使う雰囲気があり，コインを利用したインタビュー形式の学習スタイルは，生徒の学習意欲を高める上で，１つのモデルになる。

振り返り場面で１人の生徒が授業で触れたスティービー・ワンダーのハッピーバースデーを聞きたかったとコメントしていた。今後もこのように生徒の知りたいという気持ちを引っ張る授業づくりに期待したい。

＊坂元　修　教頭

キング牧師のスピーチ VTR が非常に良く，教材の工夫を感じた。だが，黒人差別についてもう少々掘り下げて授業展開すべきだった。また，生徒のワークシートへの取り組みは，非常にハイレベルだった。特にインタビューゲームの取り組みは素晴らしく，授業の様子から，「使える英語」が身についていると感じた。授業振り返りのコメントが All English であることにも感心した。また授業のなかで多くの生徒が，英語の歌を歌っていることに驚いた。

国際理解教育の観点から以下２つの視点を掲げたい。１つ目の視点として，教材については，VTR やニュース，新聞など「より本物に近い教材」を使うべきであり，その提示の仕方も含めて工夫する必要がある。２つ目の視点として，教科書の英語は，古いイメージがある。言葉は日々常に変化していることを生徒に伝え，「ALT から学ぶ」ことで表現力の育成につながっていく。

〈参加者からの感想〉

・キング牧師のスピーチは，教材として非常に良かった。ALT が南アフリカ出身という事実から，聞き取りも兼ねて「身近に感じてきた差別」などの実話を聞かせることで，世界に目を開く発展的な教材になると感じた。

【公開授業８】

中学１年　道徳　　単元名「捕鯨問題から考える」

◇生　徒　美唄市立南美唄中学校　　１年　　２２名

◇授業者　美唄市立南美唄中学校　　教諭　　悪七　広仁

◇記　録　南幌町立みどり野小学校　　教諭　　市村　慈規

（キーワード）

捕鯨問題　異文化理解　他者理解

＊単元名　「捕鯨問題から考えよう」

・寛容な心：２－（５）

・国際理解：４－（１０）

（視点１）捕鯨問題に興味関心をもち，自分なりの考えをもつことができる。

（視点２）それぞれの意見を発表し，交流することで，多様な考え方や価値観の存在に気づく。

導入において前時を想起させると，生徒から「捕鯨再開を訴える人と反対する人が対立していることが問題である。」という発言があった。本時の課題を提示し，捕鯨再開を訴える人と捕鯨に反対する人をゲストとして呼び，寸劇で討論する。生徒は２人の討論を興味深く聞き，自分なりに考えていた。そして，教師が２人のやり取りを見てどう感じたかを問うと，「相手の話を聞いていない。」「２人とも必死に話している。」などの意見を発表していた。さらに２人はこれからどのように話し合っていくことで解決に近づくのかと発問すると，「両方のよい点を取り上げる。」「捕獲しても良いが，鯨のとり方を工夫する。」「相手の考えを聞いて，相手の立場になって考えるとよい。」などゲストの討論を客観的に捉えた発言が見られた。

最後に教師が「日常生活において，自分とはちがう考えや習慣の人がいたときに，どうするか。」と発問した。生徒たちは，「一人ひとりの意見を聞いて気持ちを考える。」「考えや習慣に合わせる。」「納得いくように話し合う。」など自分の考えを発表していた。自分の考えを発表したり他の人の考えを聞いたりする中で，生徒は日常生活をふりかえっていた。

【授業別分科会】

第８分科会（領域：中学校道徳）

◇授業者　　美唄市立南美唄中学校　　教諭　悪七　広仁

◇運営・司会者　美唄市立東小学校　　教頭　中川　勝美

◇助言者　　北海道教育庁釧路教育局生涯学習課義務教育指導班

指導主事　瀧澤　義守

天塩町立天塩中学校　　校長　中村　仁昭

◇記録者　　南幌町立みどり野小学校　教諭　市村　慈規

〈授業者から〉

昨年度は，本授業を１時間で授業したが，もっと生徒にじっくり話し合わせた方がよいという反省をもとに，今年度は２時間かけてじっくり話し合わせる時間を保障した。

生徒が食いつくような題材として捕鯨問題を取り上げた。理由は，新聞報道などで情報量が多いので，生徒に資料を提供しやすいと考えたからである。ただし，政治問題や人種差別などについては十分配慮するように心がけた。

１時間目は，捕鯨問題に関する基礎知識を説明し，どちらの立場を支持するのか聞くと捕鯨反対の立場を支持する生徒が多かったので，寸劇では対立しているところを見せた。

視点１の世界に目を開く教材化の工夫については，多様な意見を認め価値判断することを目指した。視点２のコミュニケーション能力の育成については，一人ひとりに考えさせ，全員の意見を聞くことを大切にした。

〈質疑応答〉

・題材設定が難しくチャレンジャーだと思った。捕鯨問題は，国際理解に限らず政治，自然保護等に関わる他者理解が必要な大きな問題なので，話し合って解決するための焦点を生徒が絞ることができなかったのではないか。ただ，生徒は教師が意図したところに流れていたのはよかった。
・教材選びが良かった。寸劇が上手で子どもたちは対立点を理解できていた。コミュニケーション能力の育成については，課題を捉えるのが難しい。もっとかみ砕いて説明すべきだったのではないか。
・協力者の動き，特に机間巡視，声かけの配慮が素晴らしかった。
・道徳の目標である価値を高めることについては，達成していたと考える。
・授業の組み立てで寸劇が良かった。話し合いを聞く視点を確認しておくと子どもたちに考えさせやすかった。相手の気持ちを大切にすることで自分の気持ちを大切にすることができる。多数派より少数派，少数派の意見を大切にすることができるのではないか。

〈助言者より〉

＊瀧澤　義守　指導主事

道徳の授業では，寸劇において協力者が役割を踏まえて子どもたちにわかるように演技していたので生徒に考えさせたいことを理解させることができていた。また，ディベートのモデルにもなっていたのではないか。

全体を通して，子どもたちにしっかり考えさせ，書かせ，発表させていた。そのための時間保障と机間巡視をしっかりしていたので全員が発表できたことが素晴らしい。

コミュニケーション能力の育成に関しては，言語教育の充実が必要であると考える。教科の学習に限らず，学級指導等でも充実させて欲しい。

＊中村　仁昭　校長

私の勤務している学校も全校生徒が７７名で同規模の学校である。子どもたちは素直でおとなしく南美唄中学校の生徒と同じである。子どもたちは緊張していたのではないか。

担任が誠実だと子どもたちも同じように誠実になる。

寸劇はとても良かったという意見が多いが，私はもっとオーバーでも良かったと考えている。難しい話が多いので，和やかにわかりやすくすべきだと考える。そして，賛成か反対かはもっとつっこんで考えさせるべきだった。今日は参加者みなさんの意見を聞きながら自分の考えを深めることができた。帰ってから会員に今回の実践を広めたい。

課題別分科会の記録

【第１分科会】

◇テーマ　教室を地球にひらく国際理解教育の計画と実践
◇提言者　札幌市立北光小学校　教諭　末原　久史
富良野市立富良野小学校　教諭　飯村　究理
北見市立西小学校　教諭　河原　賢
◇司会・運営者　余市町立大川小学校　教諭　吉田　貴
函館市立高丘小学校　教諭　田畑　俊夫
◇助言者　北海道教育庁石狩教育局生涯学習課義務教育指導班
指導主事　新居　雅人
釧路市立湖畔小学校　校長　村瀬　正貢
◇記録者　滝川市立滝川第三小学校　教諭　成田　光美

◇上川中学校　藤崎先生

富良野小は教育計画として，地域の素材を中心に全体計画を立てられていてすばらしい。

行動化は難しいという意見があったが，行動化しようとする気持ち，実践力でいいのではないか。

帰国された方の実践は管内の研究協議会の組織の中で連携をすすめながら，それぞれの学校で実践化していくといい。上川では授業実践を集約したり地域に発信したりしている。

◇旭川聖園中学校　菊池先生

職員の意識を高めていけるのが理想だが，種まきをそれぞれの地区でしてくれると広がる。もっと総合や教科の中で国際をどうするのか考えることが大切である。

障害をもった人は不自由を抱えているが異なる人なのか。外国人も困ることはあるが異なる立場や人々なのか。ことばだけかも知れないがきちんとした考えをもたなければならない。

⇒（末原先生）子どもには異なるということばは使っていない。上手い表現が思いつかず，発表の紙面上使わせてもらった。成長のためには，自分にないものを吸収したり，考えたり，体験したりさせたく，自分とは違うという気持ちを植えつけたかったわけではない。

富良野小がどうしてこうなったのか聞きたい。

⇒（飯村先生）赴任した３年前にインドネシアから戻られた先生とすでにあったカリキュラムの手直しをしながら資料の６～８を教育課程に載せた。職員会議や研修で取り入れているが，日常の実践にまだまだ生かされていない。

・渡島　八雲の先生

子どもたちに素地がない状態では難しいので，コミュニケーション能力を小出しにしながらエッセンスを植えつけていくつもりで２年間やってきた。AET と１年間英語活動を実践するチャンスがあったが，あくまでも手がかりにすぎない。

◇標津　飯田先生

「いつでもどこでもだれでもできる」授業と自分にしかできない「オンリーワン」の授業が車の両輪のようにバランスよく教えていけるのがいい。自分の体験したことを積極的に生徒に地域に還元しなければならないが，派遣されたことを隠していた時代もある。

＜講評＞

◇<u>新居指導主事</u>

教育課程に位置づけ，ねらいの明確化が大切である。

今日の課題は英語や特定の国ばかりに特化していること。自国の文化を見直す，自国のよさに気づく場面をどうするのか。地域の特性や創造性を生かすことが必要。行動化はプロセスが大切で２９ページに流れが出ているので参考に。

情報提供①教室環境の整備（外国語活動英語ルーム　常に教室に地図があるなど世界との関わりを常に意識させる）②外部人材の活用（いろいろな地域のネットワークを作って体験談を聞かせてもらう）③ネットワークの形成（在外にいった先生を活用して欲しい）

◇<u>村瀬校長先生</u>

食べ物，着る物など身近なもの素材をいかすことで世界とは無縁ではないことがわかる。無理なくいつでもどこでもだれでもできる国際を継続してやっていかなければならない。

釧路から全国に「人際理解，人間理解教育」ということを発信していた。身近なことを広げていかないと異文化理解にならない。基盤になるものは人間関係をいかに作るか，子どもを大事に，人権を大事にすると意識を１つにできる。そこから国際理解が広がっていく。

【第２分科会】

◇テーマ　国際交流や国際協力を通した国際理解教育の実践
◇提言者　名寄市立名寄東中学校　教諭　高田　正人
恵庭市立若草小学校　教諭　東峰　宏紀
白老町立萩野小学校　教諭　鈴木　祐亮
◇司会者　北広島市立広葉中学校　教諭　杉原　將貴
◇運営者　札幌市立南月寒小学校　教諭　中池　徳幸
◇助言者　北海道教育庁空知教育局生涯学習課義務教育指導班
指導主事　藤田　祐二
室蘭市立海陽小学校　校長　澤田　光男
◇記録者　長沼町立長沼中央小学校　教諭　澤井登紀子

提言１：教科における国際理解教育の実践
提言２：異文化体験から教材化の実践
～NRC スタディーツアーと，その教材化，授業実践の報告～
提言３：自ら学び，考えを伝え合う子の育成
～国際理解・異文化交流を通して～

＜質疑・応答＞

○高田先生（教科における国際理解）への質問
質問：北見　宮下　内モンゴル留学生との打ち合わせは，どの程度，どのようにやったのか？
答え：メールのやり取りと会ってやった。都合で一斉授業にはなったが，中国全般と民族性についても話してもらうことをお願いした。留学生は日本語ができ打ち合わせはスムーズにできた。
○鈴木先生（Bafa Bafa を使って）に対する質問：
質問：千歳　堀　「大きな違いを感じられていなかった」とあるが，それは「違いを感じるべき」という前提があるのではないか。目的には「2 つの文化に相違点や類似点があることに気付くことができる」とあるが，類似点を感じている感想があれば教えてほしい。
答え：違いがあるということを前面に押し出していたのでその感想がほとんどだった。今後，アイヌ民族と世界各地の先住民族との類似点に広げていきたい。
質問：岩見沢北進小　越山　バファバファの班分けするときに，子どもたちにどのように説明し，どのような理解を得たのか？
答え：予め分けておいた。傾向は伝えていない。
質問：岩見沢北進小　越山　授業の最後に，どのようにまとめたかお聞かせください。
答え：この国はこういう国だと説明した。違いを知るということは文化を理解するのに大事だという話をした。
質問：旭川愛宕小学校　塚田　先生は特別支援の担当だそうだが，今回の授業で TT はどのような効果があったのか。
答え：普段から子どもの指導を一緒にしているので，この日だけではない。この授業は国を分けた時に指導する人が 2 人いないとできないので，その点はよかった。
質問：瀬棚町　西川　「どこかに同じもの」がなければ否定につながる可能性があるのではないか。自分と類似性がなくても認める力がこれからは必要になるのではないか。

＜意見交流＞

視点１「つなぐ」，視点 2「問題解決」
キーワード「行動化，ESD，共感的な理解」
堀：国という括りでなくて地域や個人という視点を，指導者が持っておくというのが大事ではないか。
__：「つなぐ」という点で，今は現地の協力隊とメールでやり取りができる。世界は身近になってきている。
塚田：タンザニアに派遣されたときに，日本の紹介として富士山や舞妓さんの写真を用意されていたが，違和感を持ち紹介できなかった。人と人で話していかないと共感は得られないと思った。

＜指導助言＞

◇藤田指導主事：国際理解教育は，海外経験者だけでなく，一人一人が推進者であるということを確認したい。全人的教育として展開していくために，校内でも先生方を「つなぐ」という役割をお願いしたい。また，子どもたちが実感を伴って理解していくために，地域の方の力も借りる必要があり，学校と地域を「つなぐ」ことがこれまで以上に大事である。実践に当たっては，先生の思いと子どもたちの実態をうまくすり合わせるようにしてほしい。受信も大事だが，これからは，主体的に発信できる力を身につけさせる学習活動を工夫することをお願いしたい
◇澤田校長：国際理解教育の目標は「初等中等教育における国際教育推進検討会」の報告である。これらは教育の目標と同じで，OECD の世界の学力の趨勢と合致している。高田先生の授業は，異文化理解の授業だったが，国内の中にもいろいろな文化があり共生している姿を意識させていた。東峰先生のカンボジアの問題は，肯定感を養うために，違いを乗り越える原動力，エネルギーを沸かせるような授業であった。アイヌ文化について話す場は限られているが，国際理解教育の中では昨年に引き続き，今年は鈴木先生に提言をして頂いた。

【第３分科会】

◇テーマ	外国語活動を通したコミュニケーション能力を育む国際理解教育の実践		
◇提言者	札幌市立豊平小学校	教諭	高木　千晴
	函館市立本通中学校	教諭	澤村　早苗
	鹿追町立鹿追小学校	教諭	多治見　忠
	余市町立登小学校	教諭	綱本　敬一
◇司会・運営者	幕別町立白人小学校	教諭	河井　義徳
	釧路市立美原小学校	教諭	小川　一法
◇助言者	北海道教育庁学校教育局義務教育課		
		指導主事	輕部　恭子
	旭川市立近文第一小学校	校長	田山　　裕
◇記録者	美唄市立西美唄小学校	教諭	福士　晶知

〈質疑応答〉

（浦河）中尾教諭

中学校の先生が来年以降，小学校にサポートに来るという機会が増えてくると思うが，小学校では準備の際，どのようなことをお願いしたら良いか？

澤村教諭

まずは打合せの時間のすりあわせが必要である。そして英語活動の授業では３時間くらい時間を確保することで,子どもたち,教師双方がリラックスした環境で英語活動に取り組むことができる。現在，函館市では午後の時間を活用して取り組んでいる。近隣の５校と連携し，１学期に１時間ずつ実施している。３時間目ともなると子どもたちも慣れてきてコミュニケーションがとりやすい。又，中学校に入学してきたときに，知っている先生がいると言うことで安心感を与えている。

（室蘭）相馬教諭

英語活動の年間計画の作成の仕方について知りたい。また，英語ノートが導入される。現在，全部使いこなせるのかと心配である。英語ノートは全部使わなければならないのか,それともチョイスして良いのか,今まで行っているオリジナルの活動で行っても良いのか配慮や考慮する点について教えて欲しい。

（札幌）岩村教諭

英語ノートに関連して質問したい。今は英語活動といっても各学校バラバラで活動を行っている。来年度から英語ノートが導入されるが，子どもの実態にあわせるにはどうしたらよいか？

澤村教諭

中学校の英語教諭という立場から英語ノートを見ると，小学校の先生方が英語ノートを使いこなすことは難しいと思う。そのため，使えるところは使う。今までやってきたオリジナルな実践は実践として行う。ALTと事前に英語ノートを使った模擬授業を行ってみて、無理なところは使わない。そのような方法で行っていけばよいのではないか。

〈助言者から〉

◇輕部　指導主事

小学校の英語活動では、教えた英語を子どもたちが話せる・使えるということまでをねらっていない。英語の素地を育てていくのである。指導計画を立てる際に、目標を練り合い、各単元の内容を検討していく。そのときに発達段階をふまえて作成していくことが大切である。更に指導計画では、場面設定を明確にすることも大切である。単語ベースの活動ではなく、連続的に発展していく内容が望ましい。英語ノートについては、CDやDVD、ICTソフトなどが付属し、授業のイメージを先生方がもてるような教材となっている。ノートの活用については全てをやらなくてもよい。活用できるところから取り組んでいって欲しい。

◇田山　校長

このような大会に参加し、研究授業や提言を見たり聞いたりすることで、「この実践は自分の学校でできそうだ。」とアイディアやヒントを持ち帰ることが必要だと思う。それを各地区で環流して、広げていくことができれば研究会の意義が高まる。